

## 進捗状況の概要（1ページ以内）

本事業では、1) 高校-大学-大学院の壁を下げることで秀でた学生の修学をさらに高めると共に、2) 個々の学生が修学カラーマップと StepGPA を活用して、個々の学力の特性を知り、自ら学んでいくシステムを作る、の2つを通して、ヒト-動物-環境の共生の未来を担う人材を育てる。また、その実施状況の周知及び実施体制、評価体制を整えた。令和5年度は、以下のとおり実施した。

## 1) 高校-大学-大学院の修学をシームレスにし、秀でた学生の修学をさらに高める

- ◆ 令和4年度から実施している早期履修（大学院授業を学部時代に履修できる）制度に、令和5年度は17名（内、14名が本事業関連学生）の学部学生が登録した。この内15名（内、12名が本事業関連学生）が令和6年度から本学大学院に進学し、シームレスな修学を実現している。
- ◆ プログラム関連科目のオンライン、オンデマンド配信を可能とするLMSを独自に開発、修学トラジェクトリーの機能を実装し、デモデータを用いた検証を継続して実施した。
- ◆ 令和5年度は、学部横断的研究プロジェクト、及び幅広い学びを得るためのジェネプロ研究プロジェクトを38課題スタートさせ、146名の学生が研究を開始した。
- ◆ 高校生から参加できる「いのちと共生の研究プログラム」において、令和5年度は、5校・26名の高校生が本プログラムを体験した。令和5年3月にはジェネプロ研究プロジェクトに参加している本学学生と高校生の合同成果発表会や意見交換会を企画し、高校-大学の垣根を越えた取組を実施した。本プログラムに関連して、新たに3校の高校との間で高大接続の協定を締結した。さらに、令和5年度から高校生が大学の講義を受講できる先取り履修制度を構築している。
- ◆ 研究成果の社会実装力やグローバルな視点を培うため、令和5年度から「海外チャレンジプログラム」を実施。ジェネプロ研究プロジェクトを修了した4人が海外の研究機関で研究を行った。

## 2) 修学カラーマップと StepGPA を活用し、個々の学生が自ら学んでいくシステムの提供

学生自身の中での「出る杭」を可視化させるため、修学カラーマップと StepGPA をLMS に実装した。

- ◆ 教学 IR センターを設置し導入した新規 LMS の機能の拡充として、修学状態の解析を可能とする Learning Analytics を実装し、実データを増やし本格的に稼働した。
- ◆ 令和4年度から引き続き全学科学生を対象にサイエンスリテラシーとコンピテンシーテストを実施し、結果を学生にフィードバックした。過去に当該テストを受験した学生には、過去の結果と合わせてフィードバックし、成長を実感する機会を与えるとともに、修学意欲の向上につなげた。

## マネジメント体制、実施体制

- ◆ 令和3年度に立ち上げた麻布大学大学教育推進機構（教学 IR センター、データサイエンスセンター、教育方法開発センターを含む4つのセンターからなる）において、学内の教学マネジメントを一元管理している。なお、令和6年度から、新たに機構内に、「高大接続・社会連携プログラム開発センター」を設置した。
- ◆ 教学 IR センターでは、本事業において学生の学びの可視化ならびに個別修学体制を整えるべく修学データの把握のための基盤を整理し継続して運用している。
- ◆ 教職員及び学生を対象に熊本県知事の蒲島郁夫氏による SD 研修会を行い、チャレンジする心の持ち方、周囲の人と連携し、迅速な決定、実行の仕方に関して学びの機会を提供した。また、教育改善のため、教学 IR センターによる学内 FD 研修会を実施した。
- ◆ 令和4年度の本事業の諸活動について、新たな外部評価員2名を招へいの上、講評をいただき、改善を図った。令和5年度事業活動についても令和6年度中に外部評価を行い改善に努める。

## 事業の可視化、社会との接点

- ◆ 中高校生への周知強化のため、本プログラム専用のWEBサイトやSNS（Instagram）を更新した。また、新たにパンフレットを作成し、来校者や受験生、指定校を始めとする高校にも配付を行うとともにWEB上でもデジタルブックを掲載し、広く周知し、知名度の向上に努めた。